



平成 31 年 1 月 7 日
益田教育事務所

自分で決める ～ESD の視点から～

益田教育事務所 所長 岡本 昌浩

新年あけまして、おめでとうございます。2019年の幕明けです。本年もどうぞ、よろしくお祈りします。

昨年 11 月、島根県公立小中学校事務研究大会が益田市のグラントワで開催され、主催者の一人として初めて参加しました。大会全体を通して、チーム学校のためには、学校事務職員が果たす役割はますます大きくなると感じました。また、講演の内容も心に残りました。講師は住田昌治先生（横浜市立日枝小学校長）、演題は「持続可能な学校づくり ～学校が生きた組織になるために、今あなたにできること～」です。住田先生は、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の有名な実践者です。

ESD では、現在をどう過ごすか（何を選択するか）によって未来は創られる（変わる）ということを考え方の基本に置きます。住田先生は ESD を語る上で、まず「自分で決める」ことの意義について話されました。

確かに、私たちは普段何気なく生活をしてしていますが、瞬間瞬間に何らかの判断をし、他者のアドバイスがあったとしても、最終的には「自分で決めて」います。今の自分のありようは、そうして選択してきた結果です。このように、何らかの問題に対してどうすべきかを「自分で決める」ことが ESD にとって重要な視点であると強調されたのです。

住田先生は自身のバスケットボールの教え子である元 NBA プレーヤー田臥勇太選手を例にあげ、彼がバスケットボールの世界で成功したのは進学時などの節目において、「自分で決めた」ことが大きいと話されました。確かに田臥選手は数々の輝かしい成績をおさめています、何よりも 38 歳になった今でも現役で活躍していることを先生は高く評価しています。言うなれば、選手として「持続可能」であると言えます。

一方で、内閣府の調査（H25）によると、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と思う若者の割合は、日本が約 3 割で、調査した国のうち最低という結果が出ています（右参照）。持続可能な社会をつくっていくためには、一人一人が地球の環境問題や経済問題だけでなく身近な問題に対しても問題意識をもち、自分たちに何ができるかを考え、行動することが大切です。このように、自分の身近な問題でさえも持続可能性を阻害するものにとらえ、

※意識調査の結果

アメリカ	52.9%
ドイツ	52.6%
イギリス	45.0%
フランス	44.4%
スウェーデン	43.4%
韓国	39.2%
日本	30.2%

解決することによって社会を変容しようとする姿勢こそが **ESD** の視点からみた「自分で決める」ということなのかもしれません。自分で決めてこそ、持続可能になるのです。

このように、何らかの問題に直面したとき、それを自分事としてとらえ、変えようとする気持ちを育てることは決して子どもたちだけに限りません。住田先生はこう言われます。「自分や組織の『当たり前』を見直すことが、結果的に働き方改革につながる」と。つまり、私たちが働いている学校現場の「当たり前」を見直すことから始めましょう、ということです。たとえば、学校では放課後に「打ち合わせ」をよくします。当たりのことですが、その打ち合わせの時間がよく伸びてしまいます。そこで、「打ち合わせ」を「教職員の帰りの会」とし、終業時刻になったら掲示板を見て聞きたいことはその場で聞き、言いたいことはその場で言う。帰りの会が終わったら帰ってもよいとしたそうです。言うは易しかもしれませんが、やってみると案外可能かもしれません。

着目すべきは、**ESD** の視点から働き方改革ができるという発想です。働く上での身近な問題を自分事としてとらえ、自分たちで解決法を考え、実践しようとする気持ちをもつことによって、学校として「持続可能」になるということです。ここにも「自分で決める」という理念が息づいています。

また、私たちは教職員として「持続可能」でなければいけません。持続可能でない人材育成をすれば、いずれ心が弱り、くたびれてしまうことでしょう。住田先生はあるインタビューの中でこう言っておられます。「子どもと教職員が元気に学び続けることができるために大切なのは、『ケアと共有』だ」と。「ケア」とは自分も他者もそれぞれが自尊感情をもてるようにすることです。「共有」とは情報を共有することで、共有してこそお互いにケアすることができるのであって、何かあったときは誰かが抱え込むのではなくチームで問題に対応することができ、こうして持続的に働くことができると述べておられます。

人材育成においてモチベーションを上げることは必須の条件ですが、モチベーションを上げるためには一人一人の教職員がもっている自尊感情を大切にしつつ、「自分で決める」という思いを持たせることが大切だと思います。同時に、人は一人では成長できません。成長の土台となる教職員集団の温かな同僚性があるからこそ可能です。こうしてみると、人材育成においても **ESD** の視点を生かすことができることがわかります。

新学習指導要領の前文に、「一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とあります。

「担い手」ではなく「創り手」を育てるためには、**ESD** が果たす役割は大きいことでしょう。これからの学校教育の方向性を左右するキーワードになるかもしれません。私自身も **ESD** の視点から自分ができることを見つけ、自分なりに実践していこうと思います。

【お願いするーされる】から【三方良し】の新職場体験へ

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 田原 俊輔

今年度、益田市内122の事業所と全11中学校が協働して「新職場体験」を実施しました。新職場体験は、従来行われてきた職場体験をリメイクしたライフキャリア教育の主要事業の一つです。具体的には、益田に生き生きと暮らす「ひと」との出逢いを通して、様々な価値観や生き方に触れ、「自分は何を大切にするか」「どう生きるか」を探究する社会教育プログラムです。

プログラム実施のポイントは、学校と事業所に新しい職場体験の意義をしっかりと共有してもらうことです。特に事業所とは、「自分たちの仕事や働いている人の魅力を積極的に伝える場」「リクルーティングの場」「中学生への指導を通じた若手職員の人材育成の場」であることを共有しました。新職場体験は、子どもたちのためだけに実施するのではなく、益田の事業所等を元気にするための取組でもあります。将来的に故郷・益田への還流の種まきになり、事業所が抱える後継者不足の問題に貢献できるとなれば、益田市全体にとっても大きな価値があります。つまり、子どもたちのために職場体験を「お願いするーされる」というだけの関係性から脱却し、中学校・事業所・益田市の三者にとって価値のある「三方良し」の体験活動となることをめざしているのです。

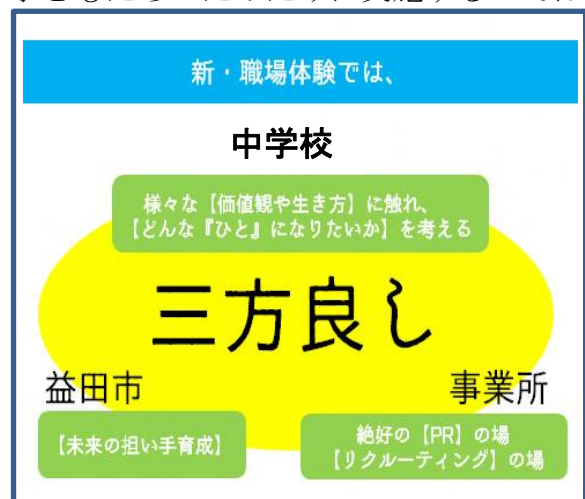
「三方良し」の実現に向けて4つの仕掛けをしています。

- ① 求人票の発行（事業所の「想い」「願い」に中学生がふれる最初の機会）
- ② 中学生への面接（社会教育課、学校教育課、産業支援センター職員による事前面接）
- ③ 事業所研修会（ねらいやノウハウの共有、つながり創り、プログラム創り、情報交換）
- ④ 体験時の対話（働く大人の職業観や人生観に直接触れる体験）

その最大のポイントは、体験時の「対話」を重視していることです。生徒対象の事後アンケート結果から、対話があったと感じたと回答した生徒は、そうでなかったと回答した生徒に比べて、「働くことに対するイメージがよくなった」「益田には魅力的な事業所（職場）がある」「いずれ地元に戻ってきたい」「益田市は魅力的な街である」といった項目で肯定的な回答をする割合が高いことが分かりました。

また、職員研修として「対話プログラム」を作成される事業所も出てきました。「単なる体験」を脱し、対話を通して探究的に深く学んでいく生徒の様子は、事業所にとっても「負担」ではなくなりつつあるようです。事業所向け事後アンケート結果には、「施設職員の指導、育成にも繋がりたい」「他の教育活動、地域活動にも積極的に関わりたい」という声が挙がっています。

このように、新職場体験という社会教育プログラムとしての成果は見えてきました。これまでの成果を活かしながら、新職場体験を通して身につけてほしい資質や能力を明確にし、生徒の実態に応じて各学校が、より主体的にこのプログラムを活用できるようにしていくことが今後の課題です。子どもたちと共に大人も主体的・対話的に深く学んでいくことが、「三方良し」のさらに価値ある取組へと進化する鍵となりそうです。



ご存じですか？「漢字のとめ、はね、はらい」問題

吉賀町教育委員会 派遣指導主事 岡本 博

ある小学校で先生と相談をしていた時に、「漢字の細部のとらえが苦手な子どもはとめやはねがうまくできなくて、漢字テストで点数がとれないんです。そして、ますます漢字が嫌いになっていくんです。」という話になりました。この話を聞いて、以前の私なら、「そうそう、そうなんだよね」と思っていました。そして、私自身も「漢字のとめ、はね、はらい」等を厳しく採点していました。

しかし、今では、「えっ、それってどうかな？」と思っています。そう思うようになったのは、ある研修会の講師が話されたことがきっかけです。同じ内容が、「あの子のつまずきを見える化する方法」（樋口一宗 東洋館出版社 2015年）に載っているので一部引用します。

学習指導要領には、「学年別漢字配当表に示す漢字の字体を標準とすること」と書かれています。この「標準とする」とはどういうことでしょうか。

学習指導要領の解説に、次の記述があります。

「この『標準』とは、字体に対する一つの手がかりを示すものであり、これ以外を誤りとするものではない。児童の書く文字を評価する場合には、『常用漢字表』（昭和56年内閣告示）の『前書き』にある活字のデザイン上の差異、活字と異なる筆写の楷書との関係なども考慮することが望ましい」

常用漢字表を見ると、驚くことに、手書きでの文字の書き方の例として、木という文字の縦画の終筆をはねているものも許容されると示されているのです。

こういった許容範囲が具体的に示されているのに、一点一画まで、活字と同じように書かなければ正しく書いたことにならないと思い込んでいる先生は少なくないと思います。しかし、そのために、いったいどれだけ多くの子どもたちが書いた文字が、誤りだと判断されてしまっていることでしょう。

「漢字のとめ、はね、はらい」について調べてみると、教育界で「漢字のとめ、はね、はらい」に厳しくなったのは、1960年頃からという説があります。この説でいくと、今教壇に立っている先生方の大半の方は、厳しい指導を受けて、そういうものだと学習してきたわけです。ちなみに、「常用漢字表」の前身である「当用漢字字体表」（昭和24年内閣告示）の「まえがき」にも「常用漢字表」の「前書き」と同じ主旨のことが記載されています。また、文化庁から「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」（平成28年4月）でも、字体・字形に関する許容について述べられています。

ここまで読んで、いくつか疑問があると思います。予想される疑問については、文化庁「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」（平成28年4月）の「第3章 字体・字形に関するQ&A」を読むと解決すると思いますので、引用します。

Q21 漢字の正誤をどう判断するか

常用漢字表の考え方では、漢字が正しいか誤っているかを、どのように判断するのですか。

A 骨組みが過不足なく読み取れ、その文字であると判断できれば、誤りとはしません。

Q 2 2 緩やかな基準でよいのか

常用漢字表では、漢字を書く際のとめ、はめ、はらいなどについて、緩やかな考え方が示されていますが、その結果、どのような書き方をしてもいいということになってしまわないでしょうか。

A どのような書き方をしてもいいということではありませんが、漢字の骨組みに影響しないような細かな違いやずれなどは、その文字の正誤に関わらないと考えています。

Q 2 5 発達段階への配慮が必要な場合

6, 7歳くらいの子供に対しても、点画の長さやとめ、はね、接し方などが「字体についての解説」のように緩やかに幅広く認められていることを前提に教える方がいいのでしょうか。

A 相手の発達段階や実態に配慮すると、当指針に沿った指導が難しいことがあるでしょう。そのような場合にも、当指針の考え方をよく理解しておいていただきたいと考えます。

Q 2 6 学校のテスト等との関係

児童が漢字の書き取りテストで、教科書の字とは違うものの「字体についての解説」で認められている形の字を書いてきました。このような場合、正答として認めるべきなのでしょうか。

A 「児童生徒が書いた漢字の評価については、指導した字形以外の字形であっても、指導の場面や状況を踏まえつつ、柔軟に評価すること」とされています。

Q 2 7 入学・採用試験等における字体・字形の扱い

入学試験や採用試験などの漢字の書き取り問題では、どのような考え方に基づいた採点が行われるのが望ましいでしょうか。

A 事前に採点の基準を公開しているのでなければ、常用漢字表の考え方に基づいた評価が行われることが望まれます。

学校で漢字を教える際には、学習指導要領の学年別漢字配当表に示された教科書体という字体を標準として指導します。具体的には、小学校1年生で指導する「木」という漢字の2画目の縦画の終筆は、「とめ」として指導するということです。指導する際に、「とめてもいいよ、はねてもいいよ」と指導するのでは、指導する先生も困りますが、指導を受ける子どもたちも困ります。はっきりしないものを学習することほど、学びにくく定着しにくいことはないからです。学習指導要領の「標準とする」というのは、学習者である子どもたちの学びのことを考えての表現であることに留意する必要があります。

子どもたちが漢字を学習する際に、先生方は「楽しく学んでほしい」と思うはずです。特に読み書き困難な子どもたちにとっては、漢字の学習はとてもハードルの高いものです。子どもたちと一緒に、楽しく学んでいきたいものです。